

令和5年 第6回二海サーモンプロジェクト及び
土地収用法の適用に関する調査特別委員会会議録
令和5年12月14日 八雲町議会議員控室

○事 件

- (1) サーモン種苗の熊石等への出荷について【サーモン推進室】
- (2) サーモン種卵の種苗生産施設への搬入について【サーモン推進室】
- (3) 上八雲種苗生産施設の購入について【サーモン推進室】
- (4) サーモン養殖部会の現状と今後の活動について【サーモン推進室】
- (5) 南北海道サーモン養殖事業推進協議会について【サーモン推進室】
- (6) 北海道二海サーモンプロジェクトについて【サーモン推進室】
- (7) その他

○その他

○出席委員（13名）

委員長 赤 井 睦 美 君
委員 横 田 喜世志 君
委員 関 口 正 博 君
委員 倉 地 清 子 君
委員 牧 野 仁 君
委員 斎 藤 實 君
委員 黒 島 竹 満 君

副委員長 佐 藤 智 子 君
委員 大久保 建 一 君
委員 宮 本 雅 晴 君
委員 三 澤 公 雄 君
委員 安 藤 辰 行 君
委員 能登谷 正 人 君

○欠席委員（0名）

○出席委員外議員（1名）

議 長 千 葉 隆 君

○出席事務局職員

事務局長 三 澤 聡 君
庶務係長 菊 地 恵梨花 君

事務局次長 成 田 真 介 君

◎ 開会・委員長挨拶

○委員長（赤井睦美君） それでは皆様、定例会終了後のお忙しい中、ありがとうございます。

早速、特別委員会を始めたいと思います。

【町長・副町長・サーモン推進室職員入室】

◎ 事 件

○委員長（赤井睦美君） まず2番目の、(1)サーモン種苗の熊石等への出荷について、ご説明よろしくお願いたします。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 委員長、サーモン推進室長。

○委員長（赤井睦美君） サーモン推進室長。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） サーモン種苗の熊石等への出荷についてご報告させていただきます。

令和4年12月から熊石サーモン種苗生産施設におきまして、約1年かけて生産できたサーモン種苗は約9万4千尾となっております。今年の5月に総務経済常任委員会で報告しましたが、10万粒の卵を入れて、約10万尾を試験的にどの程度、現行の施設で育成できるか、生産できるかということで試みたものでしたが、やはりですね、現行の施設の規模におきましては10万尾を育てるというのは、700グラム程度まで育てるというのはなかなか厳しくて、魚病の発生とかですね、そういったものが発生して、事なきを得ていますが、そういったことが途中、断続的に起きたことから、青森県の事業者とも相談して、700グラム以上の種苗をだいたい2万3千尾程度、それから350グラムくらいの種苗を約7万1千尾程度生産したところでございます。

それで、令和5年11月21日から23日の3日間かけまして、熊石サーモン種苗生産施設で育成した、サーモン種苗1尾当たり平均約770グラムを、熊石漁港におきまして、海水に馴らして、馴致という作業を行いまして、今回から20メートル円形生簀1基を増設し、生簀計3基に各5千尾ずつ、計約1万5千尾を放流し、海面養殖を開始したところでございます。

熊石漁港で海面養殖しているサーモンは、令和6年5月頃に水揚げ予定でありまして、1尾当たり3キロ超を目標といたしまして、水揚げ量は40トン程度を見込んでいるところでございます。

また、熊石以外の地域へのサーモン種苗の出荷、供給は、11月から12月にかけて順次実施したところでございます。11月9日、木曜日に岩内町に約1万尾、11月11日から14日にかけて知内町に約6万1千尾、12月1日、奥尻町に約1,300尾、12月5日、江差町に約4千尾。なお、奥尻町、江差町の種苗は、約700グラム以上の物。それから岩内、知内町の種苗は、約350グラム程度のものを提供したという

ことになっております。

報告としては、以上でございます。

○委員長（赤井睦美君） ありがとうございます。

このことについて、質問、ご意見ありませんか。

○委員（佐藤智子君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 佐藤委員。

○委員（佐藤智子君） この4自治体に売った種苗ですが、単価がいくらで、売り上げというか、その収入はいくらだったんですか。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 委員長、サーモン推進室長。

○委員長（赤井睦美君） サーモン推進室長。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 今のご質問にお答えしますが、一つ、報告し忘れがありまして、この4つの自治体、熊石と4つの自治体に、今回、出荷提供させていただきましたが、まだ約2千数百尾残っておりまして、これにつきましては、青森県の事業者に取り取ってもらうということになっております。

それで、ただ今のご質問ですが、1キロ当たり900円に消費税ですので、キロ当たり990円となっております。それで、おおむね1,900万円くらいの売り上げということになっております。

○委員長（赤井睦美君） 他にありませんか。

○委員（関口正博君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 関口委員。

○委員（関口正博君） 教えてください。奥尻町、江差町は700グラム、岩内町、知内町は350グラムということですが、これは、岩内、知内というのは、水温の関係で長く水面に入れれるから、350グラムでも対応可能ということなんですか。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 委員長、サーモン推進室長。

○委員長（赤井睦美君） サーモン推進室長。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 岩内、知内町に関しては、青森の事業者が関与して取り組んでいるというか、海面の養殖をされているということで、11月の初旬に持って行って、少しでも長く置いて成長させるというふうに聞いておりまして、それで現行の熊石の種苗生産施設で、全てを700までを無理でも、350で育てたものを運搬して、運搬のときも700より350のほうが運搬しやすいということもあるんですが、今お話ししたとおり、水温等を調整しながら長い期間育てて少し大きくするというような考えだと伺っております。

○委員長（赤井睦美君） 他にありませんか。

無ければ、(2)サーモン種卵の種苗生産施設への搬入について、よろしくお願いたします。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 委員長、サーモン推進室長。

○委員長（赤井睦美君） サーモン推進室長。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 次のサーモン種卵、発眼卵の種苗生産施設への搬入についてでございます。

令和5年、今年の11月4日、サーモンの種卵、発眼卵、約9万粒を熊石サーモ

ン種苗生産施設に搬入いたしました。先ほどお話ししたように、昨年 10 万粒超えからスタートしておりますが、やはり 10 万粒となると、ちょっと混みあい、密度が濃くなってなかなか厳しいということもありまして、今年は 9 万粒ということで、少し減らした卵の数から始めたところでございます。

現在、卵からふ化し、ふ化が終了した状況で、約 1 年かけてサーモン種苗として育成していくこととしております。サーモン種苗の生産数は、生残率を約 83 パーセントとし、これは安全をみて、もう少し高くなると思いますが、安全をみて約 83 パーセントとし、約 7 万 5 千尾を予定しております。

その内訳は、1 尾当たり約 700 グラムの種苗を約 2 万 5 千尾、約 350 グラムの種苗を約 5 万尾と予定しているところでございます。

育成したサーモン種苗は、令和 6 年 11 月から 12 月にかけて、熊石をはじめ周辺のサーモン養殖を実施している地域に供給する予定でおります。

以上でございます。

○委員長（赤井睦美君） ありがとうございます。

このことについて、質問、ご意見ありませんか。

○委員（三澤公雄君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 三澤委員。

○委員（三澤公雄君） 先ほども確認すればよかったんだけど、目標が倍違うでしょ、350 と 700 で大きさが。それでも出荷時期が一月しか違わないんだけど、これは、餌の増減によって、このサイズを目指していくのか。コストを下げるという意味も 350 にはあると思うんだけど、これはどういう違いから倍の大きさの違いになるんですか。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 委員長、サーモン推進室長。

○委員長（赤井睦美君） サーモン推進室長。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 今、お話しがあったとおり、同じ卵から育てて、サイズが半分というかたちになるのですが、これは餌の量で基本的には調整をして育てるということで、今年度は実施しております。

○委員（三澤公雄君） わかりました。

○委員長（赤井睦美君） 他にございませんか。

○委員（佐藤智子君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 佐藤委員。

○委員（佐藤智子君） 先ほど 9 万粒にした理由を詳しく教えてくださいましたが、当初、1 ロット 10 万粒って言ってたと思うんですね。今、9 万粒にということは、増減というのは結構自由にできるんですか。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 委員長、サーモン推進室長。

○委員長（赤井睦美君） サーモン推進室長。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 私も当初、昨年、当初聞いたときは、10 万粒が 1 ロットというかたちで、昨年報告したと思いますが、卵のある程度測って、目安で卵の数を推定するんですが、それで分けて販売することもできるということなも

のですから、今回9万粒ということでごっと抑えた数字で購入したところでございます。

○委員長（赤井睦美君） 他にございませんか。

（「なし」という声あり）

○委員長（赤井睦美君） 無ければ、（3）から（6）までの資料は、前もって皆様に配布されていたと思うんですね。それで、一個一個説明していただくのも有りなんですけど、時間もありませんので、もしよければ皆さんから、読んでいただいたという前提のもとに、質問から受けたいと思いますが、説明してほしいという方はいらっしゃいますか。

それぞれ説明なしで、皆様が読み取っていただいたところで、質問があれば質問を出していただいて、それにお答えしていただいて、もうこれ以上聞くことありませんよとなると、そこで議員間討議に移りたいと思いますが、その方法でいいでしょうか。説明はなしでいいですか。

（「はい」という声あり）

○委員長（赤井睦美君） じゃあ、質問なしで、いきなり質問、何ページどこどこって行って質問してください。じゃあ質問から始めます。

（3）上八雲の種苗生産施設の購入についてというところで、何かありませんか。無ければ、私から聞いていいですか。

不動産のことが全く分からないので教えていただきたいんですけども、この土地の計算の仕方は、何円何円ってちゃんと出てて、そうなんだなっていうのはよく分かりましたが、建物の価格の4,321万2千円と設定した根拠が、あまり自分自身よく分かっていないんです。もう一度教えていただけますか。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 委員長、サーモン推進室長。

○委員長（赤井睦美君） サーモン推進室長。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 上八雲の種苗生産施設の購入にあたりまして、土地の値段がまず決まって、相手側からの購入要望額が5千万だっっていうことの意向を踏まえて、建物の値段に設定したということでございます。

○委員長（赤井睦美君） それでは建物が、明確に、例えばあそこは温泉を引いてやっていますよね。そこはすごく重要だから、これだけの価値があるとかそういうことではなく、5千万円という最初の値段があって、そこから土地を引いた結果ということなんですね。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 委員長、サーモン推進室長。

○委員長（赤井睦美君） サーモン推進室長。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 土地の価格、5千万という相手側の意向に可能な限りお応えしようということがまず一つありましたが、当然、湧水が湧いていて、一部温泉水もあるということも含め、その施設を新たに建てるというより、現状のある施設を使ったほうが、購入としては安価になるということを前提に、相手側の意向も含めてこの価格に設定したものでございます。

○委員長（赤井睦美君） ありがとうございます。

他に何かありませんか。

無ければ、(4) サーモン養殖部会の現状と今後の活動についてというところに
移りたいんですが、よろしいですか。

○委員(大久保建一君) はい。

○委員長(赤井睦美君) 大久保委員。

○委員(大久保建一君) 前に貰った資料ありますよね。提出資料一覧って書いた資料。

○サーモン推進室長(田村敏哉君) 最初の。

○委員(大久保建一君) これの中でいけば、売り手さんとの話しの中で、いろいろありすぎて突っ込みどころがいろいろありすぎて困るんですが、例えばこれの 83 ページとかで、田村室長が、私には到底説明できないとか、そういうことがいっぱい書いてるんですよ。だからその 5 千万円の根拠自体が、全く無いんじゃないかと思ってしまうんですけど、この資料を見ると。その辺についてはどうなんですか。

○水産課長(田村春夫君) 委員長、水産課長。

○委員長(赤井睦美君) 水産課長。

○水産課長(田村春夫君) ただいまの今回提出した資料の 1 ページ目の②のほうになろうかと思いますが、これにつきましては、当時、私のほうで担当しておりました。令和 6 年 10 月に町長とお話をする機会があったんですが、不動産の売買関係は担当したこと無かったものですから、当時、土地の関係、売買する場合の参考ということで、管財係のほうに、土地の積算ってどういうふうにするんだろうかっていうことを相談して、それで基本的にだいたい土地の評価額、それとあと税務署さんで出している倍率を掛けてそれを参考に、それから交渉しながら決めていくということで、たまたま聞いたときに、この上八雲地区の原野の価格が、だいたい 12 円くらいになるんでしょうか。それに全体の面積を掛けたもので、だいたい 30 万 2 千円程度。それと宅地については、当時の副町長に相談したら、大関牧場の土地の購入費、そのときの値段が平米当たり 302 円だということから、その単価を掛けて 62 万 4 千円程度で、土地の値段の部分については 92 万 7 千円程度だったということで、当時、町長に 100 万程度にしかならないので、私もそういう経験もなかったものですから、ちょっと計算できないというふうな話しをしたと思います。

ただ実際にその後、2 ページ目にもありますが、土地の値段については、原野の部分については、常任委員会の時にも報告していると思いますが、熊石地区でやる
ときの想定した価格、原野価格 200 円とか、そういうふうに置き換えたもので、最終的には土地の値段が 600 万というふうな値段を積算したということでございます。

当時 100 万という部分については、建物とかも入っていませんでしたし、私の知識不足だという部分もありますが、そのようなことを発言したと思っています。

以上です。

○委員(大久保建一君) はい。

○委員長(赤井睦美君) 大久保委員。

○委員（大久保建一君） この資料、全部皆さん見たんですよね。納得できますか。もう話がそもそも破綻してると思うんですよ。だから、はっきりその5千万の根拠は無いんでしょ。そうとしか思えない。

○町長（岩村克詔君） 委員長、町長。

○委員長（赤井睦美君） 町長。

○町長（岩村克詔君） この施設についてはですね、やはりこれからサーモン種苗生産するときのバックアップということで、この土地の値段とか建物の値段、先ほど申しあげましたが、相手方の売りたい金額が5千万ということで、それを私は前回のときに答弁したときに、青森の業者が現地調べたというのを伝わったと聞いていましたが、私はそう伝えたのではなくて、それがもしそう伝わったなら誤りでありましたが、青森の業者と話したところ、やっぱりバックアップ施設を作るにしても、5千万や1億では作れませんよと。それと期間もかかるということもあり、5千万なら安いでしょということになって、買うこととということ、ある程度進めたということでもありますので、大久保委員さんがおっしゃっているとおり、施設だとか土地の値段を5千万むりくり当てがったということで、理解していただければと思います。

ただ今回、議員の皆さんの適切な判断で否決されたということですので、買うことではないので、そういうことをご理解をいただきたいと思います。

ただ、今でも、このバックアップ施設は、大変私ども必要だと思っていますし、さらに今回、皆さんご存知のとおり、あわび種苗が全滅を熊石でいたしました。これも、あわび種苗も何年かかるか分からないと、元に戻るの。そういう状況でありますので、やはりですね、青森の業者と話しても、この種苗生産の病気というのは、なかなか難しいと今回も感じましたので、この度、私は本当に残念であります。議員の皆さんが駄目だということでありましたので諦めましたが、これから青森の業者と話し合いをしながら、もしも熊石地域の種苗が駄目だったときには、今別とか深浦からもらえるように、これから話し合いをしないと、そういう思いでありますので、ご理解をいただきたいと思います。

○委員（大久保建一君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 大久保委員。

○委員（大久保建一君） 最初の説明と大分説明が変わったと思うんですよ。当初は建物がいくらで、土地がいくらでって、論理立てて説明してくれたと思いますが、今、結局、事業者の要望に沿う形になったと。それで当てはめた数字ですということ、正直に話してくれたんですが、そもそも最初の説明は、虚偽の説明だったんですかっていう話しになってきて、では、じゃあ、どこまでが本当でどこまでが嘘なのか、今後話ししていく段階で、議会に上程された資料は、本物なのか偽物なのか、本当のところはどうなんだろうって話しになってしまおうんだと思うんです。著しく信頼関係は失われたんじゃないかなって、この資料を見て、すごく感じてしまったんですが、そこら辺については、どう思っていらっしゃいますか。

○町長（岩村克詔君） 委員長、町長。

○委員長（赤井睦美君） 町長。

○町長（岩村克詔君） 確かにですね、ただこの売り買いというのは、特に土地、建物、さらにこういうふ化ができる場所という、このなかなか土地だとか建物の金額がつかない、こういう部分については、嘘をついたということではなくて、やはりそれくらいでも欲しかったということでもあります。

多分、いろんなものというのは、確かに土地、建物、判断で買う場合もありますが、その権利、特に先ほど言ったとおり、上八雲の場所は、実績として、このトラウトサーモンのふ化をして成功しているという場所で、水もしっかりとしている。さらに、先ほど言ったとおり温泉も、温いんですが、しっかり出ているということで、適しているということでもありますので、そういう場所をこれから探すにしてもなかなか難しいということと、探して調査するだけでも何千万もかかると。それと期間も3年程度かかるということでもありますので、別に嘘をついたのではなくて、欲しかったということをご理解をいただきたいと思います。

○委員長（赤井睦美君） 他にありませんか。

○委員（三澤公雄君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 三澤委員。

○委員（三澤公雄君） 今の部分は、欲しかったというけれども、欲しかったがためだったら嘘も方便というか、それが通用する民間商いもあるかもしれないけれども、町が議会に報告する説明の中に、嘘も方便みたいな気持ちが入っていたら困りますよねというのが、大久保さんの今の質問だったと思うので、今の答弁は、適切な答弁だったとは思えませんが。

○町長（岩村克詔君） 委員長、町長。

○委員長（赤井睦美君） 町長。

○町長（岩村克詔君） 今はですね、正直に話していますが、確かに、ただ、物の売り買いとかですね、価値というのは、土地にしても欲しい人と売る人の値段交渉で始まると思っていますので、別に議会に嘘をついたわけではなくて、5千万でも欲しかったということでもあります。だから、いろんなものを、人によっては価値のないものもありますが、この種苗生産、養魚を作るにあたっては、5千万でもほしかったということをご理解をいただきたいと思っています。嘘をついたということではありませんので、よろしく願いいたします。

○委員（佐藤智子君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 佐藤委員。

○委員（佐藤智子君） ちょっと何ページとか、そういう記憶がはっきりしてないんですが、取得しようとしていた施設は、3万尾しか受け入れられないというのと、あと、その事業所のほうの話で、そこは全部壊さないと使えないって、そういう文言はなかったですっけ。勘違いだったらごめんなさい。それだったら、そこをそのまま利用するというのと、随分齟齬があると思うんですが、そういう記憶違いだったら言ってください。

○町長（岩村克詔君） 委員長、町長。

○委員長（赤井睦美君） 町長。

○町長（岩村克詔君） 全部壊すのではなくてですね、あれもし使うとしたら、ある程度期間をおいて、全て消毒をして病原菌を無くして使うということです、それは壊すという話しではないですし、先ほど言った3万というのは、養魚の話で、ふ化は随時できますので、ふ化事業というのは、ふ化させて、先ほど熊石の施設もそうですが、大きくはできませんという話しで、ふ化は卵でふ化するものですから、この小さいものというのは、いくらでもというのは、時間をずらしてふ化させれますので、ある程度の量はできるということで考えていました。

○委員（佐藤智子君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 佐藤委員。

○委員（佐藤智子君） ちょっと私の受け止めでは、養魚が病気になったときに、代わりにバックアップ施設だっていうふうに思っていたんですが、それは、途中で養魚からふ化のほうに変わったのではなくて、最初からそういうことでしたか。私の勘違いですか。

○町長（岩村克詔君） 委員長、町長。

○委員長（赤井睦美君） 町長。

○町長（岩村克詔君） 結局は一番病気にかかって、ふ化したときの病気なんです。ある程度大きくなってくると、先ほど室長から説明があったとおり、ある程度大きくなった場合に、治療と言ったら変ですが、養魚に大きくなってくると餌を食べ始めると、いろんなそういう部分で、私も詳しくありませんが、成長させていけるということでご理解いただきたいと思います。

一番肝心なのは、ふ化して稚魚のときに全滅するというので、そういうことを避けるためのバックアップということで、ご理解をいただきたいと思います。

○委員長（赤井睦美君） 他にありませんか。

○委員（黒島竹満君） ちょっと。

○委員長（赤井睦美君） 黒島委員。

○委員（黒島竹満君） この特別委員会に出してきた資料なんですが、いろんなことが出てきていますが、これは本当のことなのか。実際のことを出してきたのか、間違えがあるのか、その辺だけちょっと。中身は言わなくても良い。

○町長（岩村克詔君） 委員長、町長。

○委員長（赤井睦美君） 町長。

○町長（岩村克詔君） わかりました。

出したものは、正確に出したと理解しています。

○委員（黒島竹満君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 黒島委員。

○委員（黒島竹満君） それでは全部、中身一連として出てきてるけれども、そのとおり打ち合わせしたり、話し合いをしたということでいいんですね。はい、わかりました。

○委員長（赤井睦美君） 他にございませんか。

無ければ、(3) 上八雲の種苗生産施設の購入については、一応終わりになります。

その次、(4)サーモン養殖部会の現状と今後の活動について、この中で質問、ご意見ございませんか。ページでいうと、3ページから34ページになります。

○町長(岩村克詔君) これからのことで、ちょっと話していいですか。

○委員長(赤井睦美君) 町長。

○町長(岩村克詔君) これからですが、これは今、サーモン養殖部会という、桧山漁協と話していますが、熊石地域のサーモン養殖については、先ほど議会でも洋上風力がとにかく始まったということで、その中の地域貢献に洋上風力の基礎を利用して、そこに生簀を地域貢献で作ってもらえるように、桧山漁協と協議をしながら進めているということで、可能性は少しあるのかなと思っています。

さらに、北海道から海面養殖するとき、大変反対を受けました。特に道東、道北の漁業者から、また漁連からも反対されながら来ましたが、ここに来て、北海道からも、八雲町からトラウトサーモンを先進的にやってるということで、職員を説明に来てほしいということと、さらに、この2月の大阪でやる北海道応援会議で、知事から直接、町長がサーモン養殖を説明してくれということもあり、かなり理解をしてきたということであると思っています。さらに、大変今年嬉しかったことは、今回のホタテが処理水で停滞したということで、漁業者の人とも話しをしました。さらに、この特に今、鮭が熊石では200万程度、落部は600万くらい、八雲も1,700万ということで、サケが全然獲れないということで、八雲の漁業者から、サーモン養殖はいかなものかって声が大きかったんですが、ここに来て、町長、これ下手したら今温暖化になって、噴火湾の漁業者を救うようなサーモン事業になるかもしれないということ、初めて八雲の漁業者の方に言われて、自分はやっていることは間違えないなって、少し感じました。そして、八雲の漁業者も、すぐは外海には出せないけれども、外海に出して試験をやったほうがいいんじゃないかって、そんな話しも、今聞こえてきていますので、このサーモン養殖ですね、方向は間違っていないというのにはありますが、方法もいろいろありますので、それは今、特別委員会、議会の皆さんにいろいろ意見をいただきながら進めてまいりたいと思っていますので、これからのサーモン養殖であります。よろしく願いいたします。

○委員長(赤井睦美君) 皆さん、お読みいただいた資料の中で、質問、ご意見ありませんか。

じゃあ、私、先に質問させていただきます。

14ページの下の方見ていただくと、人材がない、それから今後の取り組んでいく後継者もないっていうふうに組合長さんがおっしゃられていて、私はやっぱり、今お話しがあった、太平洋側でもやるんだってなると、ああ太平洋側でもやるんだと、それは違ってくるのかもしれませんが、今このページの、今後、熊石でどうなるかというところで見たら、やっぱり人が一番不安なんです、今は。本当に人材がないって書いているのは、本音だと思いますし、前に町長に質問したときは、儲かったら来るといふふうだったけれども、なんかまだ法人もできてないし、どこまで儲かるのかというのも試験状態だからわからないけれども、段々売っていくうちに、熊石の方は、漁業の方は見えてると思うんですね。それで広報で取材に行ったときも、半年分は収入があると。今まで冬、何にもなかったのに、こ

れで半年分の収入があつて凄く助かる。でもやっぱり半年の収入だけだったら、若い人がよしそっちに行こうって思えるわけなくて、この人がいないというここは、ここを先にしっかりとやらなければ、いくらでもどんなに成長しても成功しても、それを育てる漁師さんがいなければ、やっていけないから、将来的には熊石ではなく、全部ほかの漁師さんがいる町に種苗を売って成り立たせるんじゃないかなって勝手に想像しているんですが、この人がいないということに対しての、今現在の取り組みとか、それから、じゃあもう急に来いって言っても来るわけないから、方法を変えようとかって、そういう考え方はあるんでしょうか。

○町長（岩村克詔君） 委員長、町長。

○委員長（赤井睦美君） 町長。

○町長（岩村克詔君） 確かにですね、この大変難しい問題だと思います。人がいるから仕事になる、また仕事があるから人が集まってくるというのは、両方いろんな考え方があって、どちらも人口減少の中で苦しいんだろうと思いますが、私はとりあえずといったら言葉悪いですが、とにかくさっき言った3か月、6か月ではなくて、サーモンで1年飯が食える、それには中間育成もあり、養魚も作っていくのもあるし、先ほど言った、なんとか熊石の沖の海で、さっき言った洋上風力の基礎を使って、夢は40メートルくらいのサークルで、今その洋上風力の水深がだいたい50メートルと聞いていますので、そこは35メートルくらいでやると、大体制御して1億程度の水揚げがあるだろうと。それと、3キロ以内でありますので、陸上から餌をやれると。そんな絵を描きながら、やはり熊石で漁業者がこのサーモンで飯を食っていくと。さらに5月、6月まで出荷ですが、それを加工したり、そんなことも考えれるんじゃないかということで、やはり飯を作る、食える仕組みを作っていくということも、大切だろうと思っています。そして、もしも熊石の若い人が来ないとなると、結構、この協力隊も、今、熊石に入っていますので、移住定住も考えて、そういうことも考えながら進めたいと思っていますが、段々、熊石のサーモンに関わっている漁業者も、最初は小さくやっていましたが、いよいよ今回3個できましたので、40トン以上出荷できるということで、かなり今、期待を持ってきたということでもありますので、子どもや関係者は、熊石に戻るということを期待しています。

○委員長（赤井睦美君） 取材したときも、戻ってきてほしいけれども、もうみんな定職についていて、そんな熊石に戻ってくる気配はどこにもないって漁師の方がおっしゃっていて、そしたら今やって、1年間の収入になるには最低5年くらいかかりますよね。5年後の今現在頑張ってる方たちって、5年後っておいくつになっただけじゃあるんですか。ごめんなさい、今の年齢が分かりませんが。

○町長（岩村克詔君） 委員長、町長。

○委員長（赤井睦美君） 町長。

○町長（岩村克詔君） 今平均で57.5でありますので、5年で63歳とか64歳でありますので、サーモンの養殖はですね、餌やったり、そういう管理でありますので、ある程度、高齢者でもできるんじゃないかということと、やはりこれから自動だとか管理も、いろいろなことを考えていきますので、その辺、若い人も入ってくる可

能性もあると。ただ、熊石地域にやはり何か産業を起こすというのは、大変難しいということ、議員の皆さんもちょっと時間がかかりますが、長い目で見ながら、熊石になんとか産業を根付かしていきたい、そういう思いもありますので、ご理解をいただきたいと思います。

○委員長（赤井睦美君） 産業を根付かせたいというのは、本当にみんな一致してると思うんですね。みんながみんな本当にそう思ってると思う。ただそれを引き継いでいく人を育ててないのに、産業ばかりが大きくなって、人材育成ですよ。それをどこでどうやってやるんだって。ただ産業にばかり力が入っているけれども、人を集める方法とかって、そういうのが全く見えてきていないので、収入さえあれば集まってくるってこの昔、人口が多かったときの話しはそれでいいと思うけれども、本当にこんな人口減少で、日本中どこからも人が足りなくて、そのときにサーモンの収入で本当に集まるんだらうかって、それくらい収入が特別多かったらいいですが、変な話、私たちの商売も初任給一生懸命上げて18万とかやっても、東京、埼玉の保育士さんは、初任給22万とか、宿泊ただとか、そんなのがぼんぼん本州からくると、皆なそっちに行っちゃうんですね。だからサーモンが、日本で一番収入が、熊石のサーモン事業が収入凄いと。今、アメリカで寿司職人が、月給が100万から150万なんですって。それくらいの収入がサーモンでとれますよとなると、若い人海外に行かないで熊石に集まってくると思うけれども、そうでなければ私は、漁業も経験がないのに、収入だけで来るというのは、ちょっと不安だなって。せっかく頑張って始めたのに、人がいなくてできなかった、継続できないというのが一番心配なんですね。だから、なんとか産業を根付かせるということは一一致してるんだけれども、そのための人づくりとか、人集めとか、そこをもう少し工夫するべきだと思いますが、そこら辺はどうですかね。

○町長（岩村克詔君） 委員長、町長。

○委員長（赤井睦美君） 町長。

○町長（岩村克詔君） 確かにですね、いろんな不安はあると思いますが、だからこそ、やはり町が支援をしながら進めるべきだと私は思っています。確かに委員長おっしゃっているとおり、若い人を連れてきてというのは、いま5年目で、やっとなんとか養魚もふ化して、今年初めてふ化したものを熊石に入れたということで、前回ですね、去年ですね、昨年入れたときは、大変入れたときから大変不安でした。というのは、養魚がですね、元気がなくて、普通ニジマスというのは、今までは入れば、回って餌を食べていたのが、去年はよどんでたんですよ。だから、死亡率も多かったんですが、今回はきちんと回って餌を食べてるから、やはり幼魚を作るのも技術的にだいたい良くなってきたし、さらに今年3基入れましたので、少しずつ利益も上がってくるということで、確かに後継者を育てていくというのは、大変、赤井議員さんがおっしゃっているように難しいと思いますが、これは私としては、熊石地域の産業ということで、少し長い目を見てご理解をいただければと思います。

○委員（三澤公雄君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 三澤委員。

○委員（三澤公雄君） 委員長、人が来るのかって心配しています。それもあるけれども、来た人を教えるということで、オカムラさんは前向きに人を育てるということ、この資料の中でも発言しています。八雲町、町長の熱意からいったら、人を育てるということは意識はあるんでしょうけれども。漁業権をもってる桧山漁協さんのほうでは、あまり熱意がこの資料からは貰えないですね。それでその最近見た農業の番組でも、花の農家なんですけど、技術も何もなくても、その地域を、大学のゼミで来て、気に入った若い男性が、翌年には後輩も引き連れて5人、6人と、就農を始めて、東京にブランドものを起こすもの、3年目にして出してるっていう番組を最近見たんですが。人はその興味を持ったら来てもらえる可能性はありますが、育てるってシステムがないと、なかなか厳しいのかなと思うんですね。桧山漁協に熱意がないときに、オカムラさんが育てる、八雲町を育てるといっても、その辺の障害は大丈夫なんだろうかって思いますが。

○町長（岩村克詔君） 委員長、町長。

○委員長（赤井睦美君） 町長。

○町長（岩村克詔君） 確かにこの漁業者を育てていくのは、大変難しいと思っています。特に、この海で作業をするのも漁業権ですね、個人になるものなんです。ところが、法律が変わって、法人でも持てるということになりましたが、今のところ桧山漁協では、法人には譲らないということで、今回、知内は法人で漁業権で海でやれるということでもありますので、まだですね、法人には漁業権をもらえないので、なかなか漁業権という問題も難しい問題もまだまだ占めていますが、先ほど言ったとおり、桧山漁協の熱意が感じられないというのは私も感じられないというのは、今は感じられますが、先ほど言ったとおり、理解は先ほど言ったとおり何回も言いますが、なかなか最初に始めるものというのは、理解を得られてなかったと思います。今になって、5年経って6年経って儲かってくと理解も深まってくるし、若い人も来るんじゃないかと期待を持っています。ただ赤井議員さん、皆さん、期待だけではどうしようもないと言われてたらそれで終わりですが、何とか熊石に希望を、このサーモンで少しでも希望を持ってやりたいということと、養魚の作る場所は、漁業権関係ありませんので、青森の業者は、そこには若い人もそこに慣れた人をよこすっていうような、くる話もありますので、青森からも来ますが、やはり熊石の若い人が戻れるような場所も作っておく。さらに赤井議員さんがおっしゃっているとおり、若い人も来れるような、そういうものを私は作っていきたいという思いでありますので、ご理解をいただきたいと思います。

○委員（黒島竹満君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 黒島委員。

○委員（黒島竹満君） 今、漁協の話が出たけれども、多分、漁協が乗らないというのは、漁協のほうとの手数料の問題が、どういうふうになっているのか。売ったときの手数料が漁協に入るようになっていくのか。そういう部分はどういうふうになっているのか。

○産業課長（吉田一久君） 委員長、産業課長。

○委員長（赤井睦美君） 産業課長。

○産業課長（吉田一久君） こちらの試験、今回、熊石のほうで行っているのは養殖試験ということで、当初3年のものが、さらに本格的な試験ということで2年延長して5年やっております。この試験4年目の試験のほうからですね、手数料、漁協手数料、この辺八雲漁協、落部漁協は、確か水揚げ、出荷に係る手数料が5パーセントか5.5パーセントだったと思いますが、桧山漁協大変高くて8パーセント程度とっています。これは漁協を維持するために必要な経費ということで漁業者さんに大きく負担をさせているところですが、そういった中からでも、こちら養殖試験、当初、組合側では試験に係るものについては手数料を取らないってというような予定をしていたそうなんですけど、いろいろと各地、江差ですとかせたな、いろいろなところで始まりまして、いろいろ組合の中でも諸々ありまして、私ども3年目の水揚げから、一部、手数料、この試験から取られています。手数料率は3.5パーセントということで、今年の水揚げからも3.5パーセント引かれておりまして、おおよそ今年につきましては、70万ほど組合に納めているというような状況でございます。

○委員（黒島竹満君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 黒島委員。

○委員（黒島竹満君） 今、一部って言いましたが、その辺、結局、海面使って、漁業権のあるところを使ってやってるわけだから、本来であれば、全体の数量の3パーセントなら3パーセント、2パーセントなら2パーセントっていう中で、漁業組合と話しした部分というのはあるんですか。

○産業課長（吉田一久君） 委員長、産業課長。

○委員長（赤井睦美君） 産業課長。

○産業課長（吉田一久君） 先ほどご説明しましたが、こちら養殖試験ということで、これはそもそも漁業権に基づかない、その養殖試験に係る取扱要領という道の要領がございまして、道のほうからそういった中で承認をいただいて試験を行っております。そういった関係もあって漁協さんは、その試験の中では、販売することも試験なので、試験販売等によって得られた収益には、あらかじめ手数料なりは掛けないっていう考え方をしていたそうなんですけど、3年目の水揚げのほう、一部というのは、地元で町民販売したとか、その他PRしたとか、そういったものまで掛けたわけではなくて、実際に加工屋さんへ販売した部分について3.5パーセント掛けられたと。今年については、ほぼほぼ全体の3.5パーセント掛けたということですが、その手数料、漁協さんとの間の手数料の在り方については、部会と漁協さんとの打ち合わせの中で進められておりまして、我々のほうから特別何かというのは言った話ではなくて、実際に海面を使って、それを業としてやる部分では、漁協さんに手数料を納めるというのは、それは筋でしょうから、そこは漁師さんと漁協さんのほうで、話しのうえ進めていただきたいとのことで、進めております。

○委員（黒島竹満君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 黒島委員。

○委員（黒島竹満君） これから試験が終わるわけですね。そうなったら結局、今、養殖部会なのか、漁協が頭になるのか分からないけれども、今後はそういう手数料

の問題が大きくなっていくと思うんですね。今後、どういう考えをもって指導していくっていう考えを持ってるんですか。その部分について。

○町長（岩村克詔君） 委員長、町長。

○委員長（赤井睦美君） 町長。

○町長（岩村克詔君） 黒島議員ですね、この手数料についてはですね、我々はですね、あまり入っていかないと。町が手数料を高いとか安いとか、こうしろということではなくて、やはり先ほど言ったとおり、江差、せたな、奥尻もやっていますので、その辺、大変この桧山漁協というの大きいので、桧山漁協の考え方だと、熊石支所、せたな支所、奥尻、また江差って、考え方が結構バラバラなので、その辺、この漁業者は統一して考え方をこれから示して、漁協と摺合せしてくると思っていますので、それについて我々が、もう少し払ってやれとか、少なくすれとかということとは、無いということをご理解いただきたいと思います。

○委員（黒島竹満君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 黒島委員。

○委員（黒島竹満君） その辺はよく分かるんだけど、やっぱり今まで試験で施設を作ってきたわけだ。それを組合というのかな、それこそ振興会みたいにして、これからやっていくわけですね。その部分は、全くそこからは、養殖部会のほうと組合に任せちゃうという話なんですか。

○町長（岩村克詔君） 委員長、町長。

○委員長（赤井睦美君） 町長。

○町長（岩村克詔君） その手数料だとか、そういう部分については、あくまでも漁業者にお任せしようと思っています。しかしながら、いろんな部分というのは、町としてもご相談に乗りながらと思っていますし、これまだ非公式ですが、養魚を作る部門を、それは幾ばくかの、先ほど黒島議員さんがおっしゃった、漁協が力借りながら手数料でないかと言いましたが、そういうこともあると思うので、養魚を作る分も、3パーセントか5パーセントありませんけれども、幾ばくか水揚げすることでありますので、これは考えたほうが良いなということは、青森の業者とも話していますので、おっしゃっているとおりだと思います。

○委員（黒島竹満君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 黒島委員。

○委員（黒島竹満君） 是非ですね、そういった部分を解決していくと、多分、漁業者、組合が、先頭になってやっていくとなれば、後継者もおそらく出てくるのかなと思いますので、そういう部分はしっかりと。そっちに任せたからっていう話でなくして、ちょっと指導しながら上手くやっていただきたいと思います。

○町長（岩村克詔君） わかりました。

○委員（牧野 仁君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 牧野委員。

○委員（牧野 仁君） せっかくなので、赤井さんのお話を聞いていて、人の問題。その辺もちょっと確認というか、町長の思いを聞かせていただきたいと思います。先ほど町長は、この熊石漁業の産業振興に相当力を入れて今日まで来ています。私も

人の問題は心配しております。なぜかという、やはり今、サーモン、ご存じのとおり川上からスタートして川下での加工まで、町長は難しいけれどもチャレンジしたいという声を聞かされました。確かに卵で育てて加工してお客さんに美味しく食べていただくまでのルートを作るのは、本当に至難の業じゃないかなって。なぜかという、やはり私の落部地区でも、30年前はスケソウが大漁とかいろいろあった時期がありました。その中で、ある加工場は女工さんがいないで今金に工場を作りました。そこがやはり、その時代からも人手不足が始まっております。3、40年前から。今も外国人研修生とか、どこの加工場も頼っております。そんな現状の中で、地元熊石に呼び込むと、相当ハードルが高い気がして心配しております。そんな中で、やはり飲食店のお話を聞きますと、加工のやり方で味がかなり違うんだという話も聞かされております。そのハードルもやはり高いんじゃないかなって。鮮度がものを言いますから。それ口コミですから、口に入るものですから。我々の材料とちょっと違いますが、やはり人の口に入るものですから、その広がるのが一番怖い話で、相当ハードル高い部分なので、その辺、町長が描いている部分ですか、全体像、川上、川下までの話ですが、もし今、考えがあればお聞きしたいと思います。

○町長（岩村克詔君） 委員長、町長。

○委員長（赤井睦美君） 町長。

○町長（岩村克詔君） 全てですね、青森の業者とやっしまえば、解決ができると思っています。ただ、全てを青森の業者にやらせると、すっきりとして、今も日本で一番、青森の業者でトラウトサーモンの水揚げ高をやっています。去年で2千トン超えてると思っていますので、今回3千トンとか一万トンを目指すような話もありますので、その業者に加工から全て任せしまえば、多分いけるとは思いますが、それでもやはり面白くないって言ったら言葉悪いですけども、やはり熊石の人たちが加工したり、そんなことができたらいいなということで、考えていただければと思います。

それと八雲にも加工屋さんがいますので、その辺も考えながら、地域に何とか仕事をということを考えています。ただ、一番簡単なのは、青森の業者に全てお任せすると、青森の業者は喜んでやってくれると思いますが、それではと思っていますので、ご理解いただきたいと思っています。

○委員（斎藤 實君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 斎藤委員。

○委員（斎藤 實君） 今年度、協力隊、一人入りましたですね。これまでの経過ずっと見まして、先ほど漁業権のお話もありました。それで簡単に、漁師、漁業者も継続的にずっと続けていってもらいたいなっていう、そういう思いの中で、今、それじゃあ漁師やりたいからポンって来まして、やれるかと言ったらそういう状況じゃないんですよ。やっぱり漁業権の問題があるんです。それで漁業者になるには、権利取るとすれば90日間、年間従事しないとないんですよ。それ3年くらいかかるんです。それで初めて権利ができるというのかな、漁業者になってもいいんじゃないかって。それまでですね、元はイカつけの大型船がありました。今はないんで

すね。そしたら漁業者になるための土壌は、何なのかと言ったら、釣りでもって年間 90 日稼ぐよりないんですよ。ところが、釣りも年間通してこうやっても、なかなか生活できないんですよ。そういう状況がどうしてもあるもんですから、そう簡単に漁業者になってくれよと。漁業の継続、ここでやれるようにするために、やっぱり必要だよねっていうことは分かるんだけど、そういうものがあるものだから、そう簡単にいかないっていう現実の中で、やっぱり年間通して所得見ながら、漁業者に従事するということになる、やはり協力隊をいかに利用して、やはり何人かでも作っていくかということが、やっぱり現時点で一番方法としては、良い方法じゃないかなというふうに思うんですね。ただ、それを漁師自体でもって、組合自体には、そこの必要性を感じてやれるのかっていったら、果たしてそこもどうなのかなって。だから私は、行政がもう一本ねじ巻いて、やはり組合と話しながらですね、やっぱり人を増やしていくための手段として、協力隊を利用しながらやってほしいなど。そのためには、行政、もう一歩も二歩も踏み込んで、お願いしたいと思うんですけども。

○町長（岩村克詔君） 委員長、町長。

○委員長（赤井睦美君） 町長。

○町長（岩村克詔君） 斎藤議員ですね、本当に良い意見だと思っています。私も熊石なかなか協力隊は入らないんじゃないかと思いましたが、現在、協力隊が入っているということでありますので、漁業者も協力隊は有りだと思っています。これは、町としても協力しながら、漁協と話し合いながら進めたいと思っていますので、よろしく願いいたします。

○委員（関口正博君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 関口委員。

○委員（関口正博君） 僕もちょっと総括的な質問になっちゃうかもしれませんが、正直、海面養殖はそんなに技術的に難しいものではなくて、港湾でやっているうちは。ただ、もう一つは桧山漁協のほうに渡してやっていくということで、そこまでの心配は正直言ってしてなかったんです。それで、ただいろんな資料を見せていただいて、桧山組合長がトーンがどんどん変わっていっていると部分は僕も感じておりますし、やり方として、町として提案する場合に、やはり生産のスケールは、非常に大事になってくる。そういう意味においては、町長も当初から目標としていた奥尻での養殖事業ですね、これ今現在、どのような状況になっているのか。また、他の乙部や江差も、幼魚を買っていただいておりますが、そこら辺の状況というのは、どのように感じておられるか教えてください。

○町長（岩村克詔君） 委員長、町長。

○委員長（赤井睦美君） 町長。

○町長（岩村克詔君） 当初ですね、やはりその熊石の海面では大変だろうということで、奥尻のうにまる公園の下のほうが、元々そういう養殖をしていたということで、かなり調査しながら調べました。奥尻町も漁業者も協力するというので、話はありませんが、結構いろんな情報を得たときに、潮の流れ、いろんなもので大変だろうという意見もあり、さらに養魚だとか、そういうものを運ぶのもお金がかか

るということもあり、今は、知内で試験をやっているということですので、これから量を増やすときには、奥尻もということはありませんが、やはり一番いいのは、熊石の沖でというのをですね、更にまたやっていきたいと。ただ奥尻町の町長が来ながら、幼魚をやりながら奥尻も一生懸命進めたいというのがありますから、その辺は、町としても協力したいということで、今のところ奥尻に大々的にというのは、今、塩の流れとかいろんなことを調査して、今少し引いてるということで、ご理解いただきたいと思います。

○委員（関口正博君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 関口委員。

○委員（関口正博君） わかりました。当然、その自治体の状況によって変わっていくものかと思いますが、やはりこの販売という部分に関しては、量というのは凄く大事なところで、二海サーモンブランド、町長はこれもどこまで推進するかという部分もあるんですけども、道南全体でやっていこうとしたときには、やはり地域の連携というのが、これ種苗の部分もそうなんですけども、凄く大事なことになるかというのは、後の議論の中にも出てくるんでしょうけれども、その際に一つの考え方として、スケールを目指す。当然連携があるということが前提で、配当性っていう考え方、分かりますかね。配当、要はスケール、量を目指すということであれば、各漁業者、漁協単位の水揚げではなくて、全体で配当で利益を分配するっていうやり方、これオホーツクでほぼ主流で、それが安定的なものとして、各自治体の連携を求めるとなった場合に、当然人手の差とかありますよね。そうなったときには、やはり配当というのは一つの効率的なやり方として、各自治体を巻き込む手法として、僕は非常に有効なんじゃないかなって。熊石にとっても良いことなんじゃないかなって。それで助け合うところは助け合う、そういうことも可能になるのかなって。でもその際には、やっぱり自治体同士の連携というのは大前提なんです。だから僕は、今回、この資料を見せていただいて、僕はそこをすごく危惧していたんですけども。南北北海道のほうは、ちょっとコロナの影響もあってあれかもしれませんが、意外にしっかりとそこら辺の連携は取れているというのは、僕としては様子は見れたので。僕はサーモン推進したい派ですから。ただ、いろんなやり方というのは当然あって、そこら辺は、どんどん研究していただきたいのと、温度差っていう部分では、町長の温度は熱いんですけども、要は、この自治体の、これ自治体主導でやっていることですよ。どこもそうだと思います。だから、漁業者と自治体の温度差であるとか、そういうことを埋める努力というのも、岩村町長自体に僕は必要だと思っております。

先ほどの上八雲の件にしてもそうですが、もちろんトップですから、その決断というのは重いんですが。ただ、上手に人材を育てながらというのは、自治体でも一緒だと思いますので。その辺もちょっとよろしくお願ひしたい。あまり町長が熱くなりすぎると、上手くいくものも上手くいなくなる可能性もありますし、そこはお願いしたいなということでもあります。

○町長（岩村克詔君） 委員長、町長。

○委員長（赤井睦美君） 町長。

○町長（岩村克詔君） 確かにね、とにかく私も熱くなるほうなので、少し熱くならないようにということで、私も少しは変わってきたかなと思いながら進めていますので、今、関口委員さんからありましたとおりですね、分配方式っていうオホーツクの方式、私もいいと思っています。本当にアイデアだと思っています。ただ、自治体よりは漁協だと思っていますので、その辺、まだまだ皆さんの漁協は、先ほど言った温度差がありますので、徐々にですね、そういうこともやりながら、先ほど言った人でも物でもいろんなものが、例えば熊石、せたな、大成だとか、江差とか奥尻とか連携できるようにというのが一番いいと思いますので、慎重に漁業者、漁協者と相談しながら、熱くならないように進めてまいりたいと思いますので、ご理解をいただきたいと思います。

○委員長（赤井睦美君） 他にありませんか。

○委員（大久保建一君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 大久保委員。

○委員（大久保建一君） これまでサーモン種苗にしても海面養殖にしても、投下した税金はいくらくらいになるんですしたっけ。

○町長（岩村克詔君） ざっとで10億は行ってないと思う。

○産業課長（吉田一久君） 委員長、産業課長。

○委員長（赤井睦美君） 産業課長。

○産業課長（吉田一久君） 熊石のほうなんですけど、1サイクル目、当初の試験、当初のとき1サイクル目でかかった町の補助金は、490万になります。

○委員（大久保建一君） 全部で。何年度とかではなくて、いままで全部でいくらかけてるのって。

○委員長（赤井睦美君） すみません、もうお昼になっちゃったので、大変申し訳ないんですが、お昼から答えをいただくでもいいですか。

○委員（大久保建一君） まあいいや。ちょっと違うのでいい。

今までいくらかかって、町長の思い描く姿って、これからいくらかけて、トータル何億かけて、どれくらいの雇用生む姿を思い描いて、どうなったら成功だと思いますか。その姿が我々は見えないので、町長の思い描いているビジョンというか、トータルをちょっと頭の中にあるのであれば、教えてほしいと思います。

○町長（岩村克詔君） 委員長、町長。

○委員長（赤井睦美君） 町長。

○町長（岩村克詔君） 確かに、トータルというのはハッキリしていませんが、10億から20億だと思っています。その中で今、話ししていますが、かなり補助金は入っています。今までやったものを。

○委員（大久保建一君） 道とか国から入ってるの。

○町長（岩村克詔君） 入っていますし、これからやることも、多分10億、20億と言っていますが、その中ですね、道とか国の補助金はかなり入ってくると考えています。

それで私はですね、ふ化事業はですね、50万から60万尾。これが10人程度の雇用が生まれたらいいなと思っています。そして熊石はですね、今3基入れています

が、あの港で、漁業者との話では、あと2個入れれるんじゃないかって、そんな思いもあるので、漁業者ですね、養殖で7、8人くらいはご飯を食べれるような感じ。さらに希望を持ってる洋上風力の、本来であれば、施設は地域貢献で出してもらおうって今考えています。これはまだまだ話はしていませんが、この辺も地域貢献で今の業者に出していただくかなということを思っていますし、国や道の支援ももらいながらやっていきたいと思っています。ただし、町の実質のお金というのは、そんなに多くないだろうと。2億から3億、4億、5億はいかないんじゃないかって。実質の負担金ですよ。と思っています。

○委員（大久保建一君） 5億というのは、これまで出した分も含んでってこと。

○町長（岩村克詔君） 委員長、町長。

○委員長（赤井睦美君） 町長。

○町長（岩村克詔君） 含んでです。というのはですね、今、幼魚を作るところも、議会から過疎債でいいよって言われていますし、これも仮想ということですので、実質、幼魚を作る場所は、実質、町の負担はないと考えています。

それと洋上風力も、地域貢献でやってもらおうと思っていますので、実質、町の負担は、5億はかからないだろうと。2億、3億、4億、5億程度と考えています。

○委員（大久保建一君） まあ分かりました。

○委員長（赤井睦美君） それでは、お昼になってしまったのですみません。

（4）のサーモン養殖部会の現状と今後の活動について、そして（5）と（6）は午後からということによろしいですか。

（「はい」という声あり）

○委員長（赤井睦美君） それでは、1時から始めたいと思います。よろしく願いいたします。

休憩 午後0時05分

再開 午後0時57分

○委員長（赤井睦美君） 4分ほど早いんですが、全員揃いましたので始めさせていただきます。

午前に引き続き、大久保委員の質問に対してのお答えをいただいていますか。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 委員長、サーモン推進室長。

○委員長（赤井睦美君） サーモン推進室長。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 午前中の大久保委員のご質問ですが、令和元年から令和5年度、令和元年度から4年度は決算額、それから令和5年度は予算額になりますが、この期間、二海サーモン関連の事業費として2億9千万円ほどかかっています。この中には、昨年度の災害復旧とかも含めた金額です。

○委員長（赤井睦美君） ありがとうございます。よろしいですか。

○委員（大久保建一君） いいです。

○委員長（赤井睦美君） 他にありませんか。

○委員（大久保建一君） はい。

- 委員長（赤井睦美君） 大久保委員。
- 委員（大久保健一君） それと、今後いくらかけてくって話し聞きましたっけ。な
んぼって言ったっけ。
- 町長（岩村克詔君） 俺から。もう一回言う。
10億から20億くらい、まだ全然。ただし、実質負担するのは、5億以下でし
ょうということです。
- 委員（大久保健一君） わかりました。
- 委員長（赤井睦美君） 他に、このところで質問はございませんか。
無ければ、また改めて最後にまとめて聞きます。
次は、南北海道サーモン養殖事業推進協議会について、35ページの一枚だけだ
すが、この中で質問・ご意見ありませんか。
無ければ、私から。
この南北海道サーモン養殖事業推進協議会と、その次の渡島檜山管内の自治体と
サーモン養殖をはじめとする道南の協議会みたいな感じ、この関係性というか、今
後の進め方における関係性というか、よく分からないんですが。この下の渡島檜
山管内の自治体というのは設立されたことによって、上の南北海道サーモン養殖事
業推進協議会は無くなったわけではないんですよ。この関係性を教えてください。
- 町長（岩村克詔君） 委員長、町長。
- 委員長（赤井睦美君） 町長。
- 町長（岩村克詔君） 実際は無くなったと思っています。
それで、結局ね、初めのときには、どの自治体もやるような話しで集まったん
ですが、ふたを開けたら、先ほど説明したとおり、江差、奥尻、せたな、熊石と、檜
山管内ではこの4町しかやらなかったということで、この函館市長が号令をかけ
まして、渡島檜山でそういう団体を作って情報共有しながら勉強したほうがいいん
じゃないのっていうことに切り替わりましたので、今はその会議で情報公開したり、
八雲町の事例も報告したりしながら情報共有して進んでいるということで、全体
でやるのはもうないと思っています。南北海道というのは無くなって、渡島檜山全
体でやってるということで理解していただけたらと思います。
- 委員長（赤井睦美君） ここはもうよろしいですか。
- 委員（三澤公雄君） はい。
- 委員長（赤井睦美君） 三澤議員。
- 委員（三澤公雄君） それでいったら、最初の絵を描いたのは南北海道サーモン養
殖事業推進協議会の中で募った自治体の中で、稚魚を販売してっていうビジネスモ
デルだったと思うんですが、直近のあれでも、これとは関わりがない岩内町なんか
が入っていますが、今の描いているビジネスモデルというのは、ここで聞いてもい
いんですか。
- 町長（岩村克詔君） 委員長、町長。
- 委員長（赤井睦美君） 町長。

○町長（岩村克詔君） 最初作ったのはですね、南北海道というのは、参加しようというところで集まったんですが、実質、先ほど言ったとおり、上ノ国もやるとかここもやりたいやったいって始まったんですが、実質始まったのはそういうことで、結局は、種苗を供給するということもあったけれども、情報交換しながら、やっぱり全体的にも育てていこうということでありますので、函館の市長が号令をかけて集まった団体が、一番それに適しているだろうということで、それに移行しているということで、ご理解いただきたいと思います。

種苗を、売るものに対しては、余ったものは今の青森に全て買っていただきますが、地域に来た方には、量はありますが、お分けするということには、これからも変わりないと思います。

○委員長（赤井睦美君） よろしいですか。

他にありませんか。

無ければ、(6)北海道二海サーモンプロジェクトについて、に移りたいと思います。36ページからになりますね。

これについて質問、ご意見ありませんか。

○委員（関口正博君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 関口委員。

○委員（関口正博君） すみません、これもちょっとお伺いしたいんですけども、ちょっと何ページか忘れてしまったけれども、木古内での事業ですか、当初の枠組みからいけば、木古内も最初は入っていたんだけれども、今はまた違う企業さんと組んでる。ただ種苗は、八雲町から当初は入れるということで進んでいたんだけれども、青森の業者さんが、一応、競合相手になるということでというやり取りがあったと思っていたんですが、今は木古内というのは、どのような感じの事業になってるんでしょうか。

○町長（岩村克詔君） 委員長、町長。

○委員長（赤井睦美君） 町長。

○町長（岩村克詔君） 木古内はですね、サクラマスは北海道の事業でやっています。それでトラウトサーモンは、函館の水産会社と一緒にやっていますので、そこに我々が入るといのは、難しいということで入ってないということでご理解いただきたいと思います。あくまでも函館の水産会社が、幼魚も全部買ってきて費用を出しているというのは聞いています。

○委員（関口正博君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 関口委員。

○委員（関口正博君） 函館の水産会社っていうのは、どこから幼魚を持ってきていって情報はありますか。

○町長（岩村克詔君） 委員長、町長。

○委員長（赤井睦美君） 町長。

○町長（岩村克詔君） これ想像ですが、青森だと思います。青森じゃない、福島だと思います。想像です。ほとんど秘密なのさ、幼魚って。

○委員長（赤井睦美君） 他にありませんか。

- 委員（黒島竹満君） はい。
- 委員長（赤井睦美君） 黒島委員。
- 委員（黒島竹満君） しっかりは調べてはないんだけど、知内の、今、やり始めた、そのシステムだとか、大分、八雲とはちょっと違う形式だと思うんだけど、その辺は、情報入っていますか。
- 町長（岩村克詔君） 委員長、町長。
- 委員長（赤井睦美君） 町長。
- 町長（岩村克詔君） 知内についてはですね、あくまでも今別、深浦方式と同じで、あくまでも法人が漁業権を取得して、法人がすべてやっていると。知内町、知内漁協、組合は、場所を貸してるということで、その辺も先ほど黒島議員から質問があったとおりに、水揚げの何パーセントって話はしてると思いますが、その辺の詳しいことは聞いていませんが、そういう状況であります。
- 委員（黒島竹満君） はい。
- 委員長（赤井睦美君） 黒島委員。
- 委員（黒島竹満君） そしたら、その町のほうの助成金だとか補助金だとかっていう部分は、無いってどういうことなんですか。
- 町長（岩村克詔君） 委員長、町長。
- 委員長（赤井睦美君） 町長。
- 町長（岩村克詔君） 全く入ってないって聞いています。
- 委員（黒島竹満君） はい。
- 委員長（赤井睦美君） 黒島委員。
- 委員（黒島竹満君） そしたらその業者が、100パーセント出資してやってることなんですね。分かりました。
- 町長（岩村克詔君） そう聞いています。
- 委員（関口正博君） はい。
- 委員長（赤井睦美君） 関口委員。
- 委員（関口正博君） 種苗生産施設について、お伺いさせてください。当初の打ち合わせより、先ほど町長もおっしゃっていたけれども、種苗生産、末端まで含めて町で関わり持って、いくらかでも利益を落としたいという思いから、その種苗生産施設についても、町が何とかお金を出してということで進んでいるかと思います。オカムラさんも、当然、種苗というのは大事だというのは非常にあれで、当然、水利権の問題も、熊石の部分から見ても魅力的なものであると映ってるとするならば、オカムラさん自体が、一つの考え方として、オカムラさん自体の企業誘致として、町は用地提供ってかたちのみってかたちというのも、検討されることはあったんでしょうか。
- 町長（岩村克詔君） 委員長、町長。
- 委員長（赤井睦美君） 町長。
- 町長（岩村克詔君） これはですね、なかなか先ほど言ったとおりに、桧山漁協は、漁業権を法人に渡さないということでありましたので、やはり幼魚については、やはりある程度、町、我々熊石地域も関わっていかないと、民間企業でありますので、

自由にされてしまうということもあるので、それと熊石地域に幼魚を生産する一つの事業、産業ですね、人も雇用できるし、さらに先ほど言いましたとおり、もしも噴火湾側で、これまた海でやるというときも、幼魚は持ってこれるということでもありますので、やはり町が絡んでいく、熊石が絡んでいくというのが、一番いいだろうと思ってやりました。

ただ、途中から噴火湾のほうは、落部もやめて、外海は無理だよとことになりましたが、今回また、そんなことも出てきているので、そこを期待しながらやっていくということで、ご理解をいただきたいと思います。

○委員長（赤井睦美君） 他にありませんか。

○委員（黒島竹満君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 黒島委員。

○委員（黒島竹満君） 今の噴火湾もっていう話しだったんだけど、今後、その漁港以外でやる場合も、町の研究とかって、研修とかっていうかたちの中でやっていくのか、それとも今の知内みたいに企業に任せちゃうのか、その辺はどういう考えを持ってるんですか。

○町長（岩村克詔君） 委員長、町長。

○委員長（赤井睦美君） 町長。

○町長（岩村克詔君） 全くですね、その辺まだ考えていませんが、八雲漁協についても、法人には漁業権を渡さないような話がありますし、今、漁業者の話でありますので、あくまでも漁業者、漁協がですね、外海にしても、港の中で試験をやるにしても、やっていくものということで今、思っています。そのときになったらまた、町として支援できるかどうかは、議会と一緒に協議したいと思っています。

○委員（斎藤 實君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 斎藤委員。

○委員（斎藤 實君） 養殖やるには、餌の関係が非常に金額的に大事なのかなっていうふうに認識しているんですが、当初予定されたものと、ここ1、2年相当高くなっているという状況なんですけど、その辺のところはどうなんでしょうか。

○産業課長（吉田一久君） 委員長、産業課長。

○委員長（赤井睦美君） 産業課長。

○産業課長（吉田一久君） 斎藤委員ご指摘のとおり、餌代につきましては、試験当初から現在までで、それなりに上がってございます。当初、1キロ214.5円でした。それで、現在1キロ当たり、確か税抜き255円ですね。税込み280円ちょっとというようなかたちになってございます。この単価につきましては、現在5サイクル目続けてございますけれども、昨年と今年の餌代については、とりあえず今、同じ価格でいっているところです。今後、またもしかしたら上がるかもしれませんが、今のところ、他の銘柄から見ると、その辺の上げ幅については、緩やかなのかなということでは捉えております。

○委員（斎藤 實君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 斎藤委員。

- 委員（齋藤 實君） 町長は、この事業が始まる時にですね、将来的には餌の製造もしなきゃないんじゃないだろうかって、検討もという考え方示されましたが、将来的にはどのような考えを持っておられますか。
- 町長（岩村克詔君） 委員長、町長。
- 委員長（赤井睦美君） 町長。
- 町長（岩村克詔君） これはですね、八雲町熊石だけ単独ということにはなりませんので、先ほど言った渡島檜山のサーモン協議会とか、道総研だとか、北海道の力を借りながら、餌の研究、更に我々北米から買ってる卵でありますので、その辺もこれから北海道と協力して、道総研とも協力して進むものと思いますが、まだまだスタートも切っていないというのが実情でございますので、注意深くその辺は、要請活動していきたい。我々が取り組める大きさでないということで、ご理解いただきたいと思います。
- 委員長（赤井睦美君） 他に。
- 委員（関口正博君） はい。
- 委員長（赤井睦美君） 関口委員。
- 委員（関口正博君） もう一つだけ。当初、法人を設立するというガイドラインが示されてから、水利権の問題があってそれが取得されてから設立、法人を設立するというふうに変わっていったかと思いますが、そのスケジュールというのは、それでよろしかったんですか。
- サーモン推進室長（田村敏哉君） 委員長、サーモン推進室長。
- 委員長（赤井睦美君） サーモン推進室長。
- サーモン推進室長（田村敏哉君） 今の質問を含めて、今回お配りした資料の一番最後の想定ロードマップの修正案のところをご説明させていただけたらと思いますが、よろしいでしょうか。

昨年9月に、今後の方向性ということで示した想定ロードマップの案に、今回、動きがあった部分を赤字で修正した部分でございます。それで、以前もちょっと報告させて、答弁とかでさせていただいた中で、当初想定していたよりも、見市川の水利権の取得に年数がやはりかかると。それで、今回、見市川の水利を得る量が、やはり現状使用している水利の6倍から7倍くらいを取得しなければ、我々が今考えている種苗の生産にはできないということから、今、このロードマップの中段、サーモン種苗生産の施設増設っていうところで、令和5年度、今年度、施設の基本設計を行って、水利権を取得するに向けた事前協議を始めつつあるというところでございます。実際に水利権申請するまでに、いろんな課題なり片づけないとならない部分を、水利権者である道、それから道も国にも協議すると言っていますので、そこにしながら、ある程度固まった段階で実施設計を付けて申請しなければならぬと。それに、2年から3年くらいはかかるというようなことで、現在言われていますので、それに伴いまして、実施設計は来年度を見込んでいますが、それに合わせまして種苗生産法人についても、同じように朱書きで後ろ倒ししています。併せて、地下水の資源調査ということで、今年度、基本的な調査をしています。温暖化というか、やはり温かくなって、特に夏場の種苗生産に、地下水の冷たい水が必要だ

ということから、現在、基本調査を終えて来年試掘、試しのパイロット的な調査をやるといふようになって、その調査結果を踏まえて、井戸の掘削の検討をやっていくと。

それで、その増設にまで時間がかかるものですから、それまでの種苗生産をどうするかという部分につきましては、今回の委員会の冒頭で、とりあえず報告させていただきましたが、700グラム程度の種苗と、あるいは350グラム程度の種苗を使い分けながら、生産量を可能な限り増やして、それを周辺の町村等に売却していくというようなかたちで進めたいというふうに考えているところでございます。

○委員（関口正博君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 関口委員。

○委員（関口正博君） ありがとうございます。

すみません、それと施設整備の予定なんでしょうけれども、これは報告を受けているかもしれませんが、確認させてください。種苗生産施設に関しては過疎債を使うということで、考えていることをお聞きしておりますが、法人設立後の資金というんですか、そういう運転資金というんですか、そういうものの手当てというのは、民間借り入れとかそういうような手法なんでしょうか。それとも、何か町からまたお金入れるとか、そういうかたちになるんでしょうか。

○町長（岩村克詔君） 委員長、町長。

○委員長（赤井睦美君） 町長。

○町長（岩村克詔君） 種苗生産施設については、種苗生産、養魚施設については、民間企業が運営していくということで考えていますので、町の出資も先ほど言ったとおり、出さないと監視だとか管理できませんので、ある程度出しますが、主は民間企業が運営していくということで、民間がやっていくということで、町でそれからお金を出すことは考えていませんので、ご理解をいただきたいと思います。

○委員長（赤井睦美君） 他にありませんか。

○委員（三澤公雄君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 三澤委員。

○委員（三澤公雄君） 赤い文字で種苗生産の規模を小さくしたんですね、これは確か。今回、11月に岩内町に1万尾販売しているんですが、岩内町さんは漁協も違うわけだし、そして視察に行つて、その潜在能力というか、ポテンシャルがすごく、空いている港湾も八雲より深くて広くて、陸上も空いていて、そして私たちよりも後発なのに、どんな商品ができるんだろうっていう研究もされていて、そして、八雲と期せずして海洋深層水って同じものを持っていて、海洋深層水の可能性、温度が低いっていう可能性も凄く研究されているんですね。場合によっては、八雲がやろうとしていた稚魚の大量生産で、稚魚の販売なんかを、今後、岩内さんが始めるなんてことになった場合に、八雲もまたそういう意味でも軌道修正迫られるのかなって、余計な心配なのかもしれませんが、岩内っていう存在は、どういうふうに考えていますか。

○町長（岩村克詔君） 委員長、町長。

○委員長（赤井睦美君） 町長。

○町長（岩村克詔君） 岩内は、二つがあって、一個は海洋深層水で研究していると。これは全く商売になるような研究でないという感覚はしています。それで今、1万尾を入れている。これは、あくまでも青森の業者、知内と同じ方式でやっているということをご理解いただきたいと思います。深層水の上がる量で、商売にできるような養殖はできないということで、我々もかなり研究して調べましたが、無理ということで、我々は諦めましたので、量的に上がらないということをご理解いただきたいと思います。あくまでも研究ということで考えております。これは深層水では我々の想像ですが、全く別でやっているということです。

○委員長（赤井睦美君） 他にありませんか。

○委員（三澤公雄君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 三澤委員。

○委員（三澤公雄君） 日本海側の水温が高いという問題は、先ほど風力発電の桁の下を話していましたが、そことてやはり海水温が上がってきたら、課題は同じだと思うんですね。そういう意味でいけば噴火湾の最近の動きは、非常に助かるというか、やっと気づいてくれたのかって思いは、僕も町長と同じなんです。

いいです。わかりました。ごめんなさい。

○委員長（赤井睦美君） 他にありませんか。

無ければ、全体を通して質問、ご意見をいただいて、無ければ、理事者の方には退席していただいて、委員間討議をしたいと思いますが、全体を通して何か、いらっしやるうちに質問。

○委員（倉地清子君） はい。

○委員長（赤井睦美君） 倉地委員。

○委員（倉地清子君） 全体をして私も思ったところですが、先ほど掘り起こしていくと、どうしても欲しいんだというものがあつたから、土地に関してです。上八雲の土地について、どうしても欲しかったからこういうふうになってしまったんだということをおっしゃっていて、嘘はついたわけではないとおっしゃった部分ですが、それって、ただ町長が思った熱意を言ってくださるだけでよかったものを、言葉を言い換えること自体は、私はちょっと虚偽かなって思うところがあるんですね。それで、何でそれを言うかといったら、今後、これから熱意がどうしてもほしかったら違うことを言いかえて報告されるのかと思ったら、どういうふうに今度判断していくのかって材料が見失ってしまうので、町長の発言というのは、ちょっと私は苦しいかなと思って聞かせてもらったので、今後の判断の仕方として、ちゃんとした本当のこと、嘘ではないとおっしゃったので嘘ではないのかもしれないですけども、あつたことそのまま伝えてもらえるということが、あつたらいいなと思いますが、どうですか。

○町長（岩村克詔君） 委員長、町長。

○委員長（赤井睦美君） 町長。

○町長（岩村克詔君） 本当とか嘘ではなくて、これはですね、モノとか土地、売る方の金額と調整していくということになるし、嘘でもなんでもなし、あくまでも売る方の金額に、我々も自分も高くないなっていう意識がありましたので、それに

合わせたと。例えばの話をしますが、新幹線のですね、用地買収は、通常ですね、あの辺の農地というのは、だいたい反 20 万とか 25 万ですが、410 万で機構が買い取ったそうでありますので、それも嘘でもないし、やっぱり売るほうと買うほうとで、そういう金額になるということは、どこでもあり得るということで、ただ今回ですね、議員の皆さんから、そらばからならんということでありますので、諦めました。ただ、これからも、嘘はつかないで、嘘をついているつもりはありませんが、欲しいものは、やはりその辺も少し議員の皆さんにですね、説明をして、これから提案するというので、ご理解願いたいと思います。

○委員長（赤井睦美君） よろしいですか。

（「はい」という声あり）

○委員長（赤井睦美君） 他にありませんか。

じゃあ、理事者の皆さんに退席していただくということでよろしいですか。

本当にお忙しいところありがとうございました。特に、サーモン推進室長には本当にお忙しい思いをさせて、みんな心配していました、倒れるんじゃないかって。あと何か月かしかありませんが、最後までよろしくお願いいたします。本当にありがとうございました。

【町長・副町長・サーモン推進室職員退室】

◎ 委員間討議

○委員長（赤井睦美君） このあと、今日の資料と報告を受けて、今後、サーモンについてまた話したいと思いますが、皆さんはどうですか、今後、こういうことがもっと知りたいとか、もうこれでいいんじゃないかだとか、いろいろあると思いますが。皆さんどうですか。フリートークをお願いします。

○議長（千葉 隆君） 5 千万の関係。欲しいものがあれば、交渉相手の言い値でお金で買いますと言い切ったけれども、適正な価格で買う方法を理事者側は知っています。土地収用法によって、適正な価格で提示をして、それが折り合わないんだったら土地収用法の手続きに基づいて事業認定をいただいて、それで公共性のあるものであれば、収用して手に入るというのは、後で分かったことだからなのかも分からないけれども、あとでも分かったはず。だから修正できたんですね。適正な価格を算定して、それで土地収用法、そしてその土地収用法の部分でも、あとの手続きをやらないで、事業認定だけをすると言ったから。だから、適正な価格の前に手続きは終わるわけですよ。だから、そこにいけば、価格の話にはならないんですよ。手続き的に。だから、あくまでも行政が土地を取得するときには、欲しいとか欲しくないとか、それは欲しいから購入するので、どちらにしても。まずは、適正な価格はいくらですかということを根拠に、いくらで買いませんかって。あるいは、いくらで売れませんかっていう協議をして、その中で、あっちが売らない、この価格で売らなきゃ売りたいとか、それで逆に言えば、欲しいから、低額で欲しかったら土地収用法の手続きするわけですよ、普通は。今回はやっぱり適正な金額が、いくらであったかということを最初にやっぱり算定して、協議というか、価格の協

議してないような、した経過が見られないなっていう部分があるのかな。そこだけはやっぱり、今後違う場面で土地を買う、建物を買うというときに、最終的には今のようには5千万でもいいんだわ。でも、適正な価格がいくらであるかということに基づいて、そしたら町内でこのくらいで予定価格をどうするかっていう部分を積算しないとにならないと思うんだわ。その手続きが、田村課長がしようとしたら、俺に任せみたいなかたちで進んでしまったから、そこら辺がやっぱり、業者側が悪いわけでもないし、こっちの土地を購入するルール、手続きとか、それを怠った部分はあるんじゃないかなと思うんだよね。だから、どっちにしても、あとからでも土地収用法を使えば、適正な価格で収用できたかもしれないし、それで公的な事業で認められないと、それはそれで土地収用法の手続きを取れない場合もあるけれども。そういう手法もあるんだから、なかなか町長さんが言うように、言い切れない部分ってあるのかなと思うんだよね。だからそこは皆、同じような感覚は持つてると思うんだわ。だから今後、同じように違う物件買うときに、しっかりとそういう手続きを踏んでやりなさいっていうようなかたちを言わないと、今でも新幹線の土地の話をして、高くてもいいんだっていうような感覚で、同じように進むということのほうが、進んでしまったら、何で今回取り下げたよっていう部分がなくて、もう一回同じようなことになるんじゃないかって気がしてならないなっていう感想があります。

- 委員長（赤井睦美君） 他にありませんか。
- 委員（佐藤智子君） 今、議長が、推進室長がちゃんと土地の。
- 議長（千葉 隆君） 推進室長じゃない。前の水産課長。
- 委員（佐藤智子君） それを資料から読み取ったの。
- 議長（千葉 隆君） 100万円の。
- 委員（佐藤智子君） やろうとしたら俺に任せとけっていう、そういうのは誰に聞いたの。
- 議長（千葉 隆君） 俺に任せとけではなくて。
- 委員（佐藤智子君） 読んでの話。
- 議長（千葉 隆君） 自分はできませんと言ったら、ちょっと待ってれだかって言ったんだよね。だから、積算と、説明できませんと言ったときに、町長が発言してるんだよね。どこだったっけ。待ってなさいって。何ページだったか。
(何か言う声あり)
- 委員（佐藤智子君） それでも、2ページに管財から出された資料には、今回請求したから出てきたって。
- 議長（千葉 隆君） そうだけれども、その前にも一部。
- 委員（能登谷正人君） 課長とか、いろいろ皆さん議員だけが情報を持つてるから。その辺が、上手く大袈裟になると通用しなくなるからさ。深く誰が言った、彼が言ったではなくて。一回一回喋ったらね、職員たちも固まっちゃうよ。誰が言った、彼が言ったっていうことを言うんであれば。
- 議長（千葉 隆君） こういうふうに、顛末の83ページ。聴取書というので、土地購入を新年度当初予算へ計上する。その旨を伝える部分で、土地購入額を管財へ

依頼し積算したが、100万程度にしかならない。温泉は、湧き水の積算も調べたが、積算できない。私には積算説明ができない。副町長、財務課交えて庁内で協議したほうが良いのではないかと。町長、温泉、湧き水の価格を2千万とかにする。今は動かなくていいと指示されたって。だから、この経過と積算した資料は何ですかという部分がきてないんだわ。請求していても。その100万のやつと積算のやつは、あとでの資料に出てきてるけれども。だから、交渉するにあたって、積算したんでなくて、5千万円を言われたから、5千万円に合わせて土地と建物の価格を決めたって言うわけだから。だからそこが、決めるのはいいんだけど、やっぱり適正な価格がいくらであるのかということは、積算してなかったということが、今日明らかにされたから、やっぱり土地を購入するときには、まず適正な価格がいくらなのかという手続きをして、その中から交渉して、譲れないとか譲れるとか、そういう中で最終的にあれなんだけれども。せつちなのか分からないけれども、そういうことになると、結局、なぜそれができなかったといたら、先に価格を決めたということになるんだわ。その価格を決めたのは、当事者の会社と町長の会話の中に、いくらで売るといって5千万と。それで土地はいくらだ、価格はいくらだというふうな会話に現れてるんだわ。だから先に積算をしないで、言い値で価格を決めたというのは、事実系列で免れないんだよね、そこは。だから積算しなかったのさ。というふうにしか事実経過は見れない。それで町長が認めているのは、俺が欲しかったから、相手があるから価格を決めたといっ、今日も裏付けしてるのさ。だから嘘ではないのさ、言ってるのは。先に決めたというのは。町長は嘘を言ってるわけではなくて事実を言ってるんだわ。でもやっぱり間違っているのは、やっぱり積算して適正な価格を積算して、協議するという姿勢がなかったということ。

○委員（牧野 仁君） ただこの間の資料から見たらね、町長のコメントの中に、適正な金額と議会と同意も必要となると。条件が合えば購入も考えたといって答弁。これに書いてる。だから適正な金額で議会と同意も必要だって本人も言ってるんだよ。

○議長（千葉 隆君） その適正な金額は、町長の言う適正な金額というのは、相手が言った適正な金額しか頭がないから。だから手続きとして、管財で価値観を示してるわけだから。それは無視してるわけではないけれども、乖離があるということを町長は意識してるのさ。

○委員長（赤井睦美君） 他にありませんか。

次も、いっぱいいろんな総会があるので、今日のお話合いをもとに、今後の方向性を決めていきたいと思えます。特に皆さんの中からあれば、もちろん出していただいて、無ければこれで終わりとはならないので、小委員会で一度まとめを作って、皆さんにお示しして、そこで足りないものを付け加えていく。そんなかたちでもよろしいですか。これだけは絶対にといいはないですか。

○委員長（赤井睦美君） 無ければ、よろしいですか。

○委員（大久保建一君） いいですか。

○委員長（赤井睦美君） 大久保委員。

○委員（大久保建一君） 価格の決め方もあるけれども、その価格の説明をうちら受けてきてたんだよね。それで議決して一回すんなり通したりして、そのときは、その建物の価格がいくら、土地がいくらっていう説明をそのまま信じてしまって、それは一回可決しちゃったよね。だけど、今この資料を見ると、その根拠が全然ない。要は虚偽の説明をしていたということ、冒頭町長の謝罪から入るんじゃないかって思っていた、今日は。そしたら、それがなくて開き直ったの。だから、そしてそれから聞いたのが、これからいくらかけていくのっていったら、10億から20億この事業にお金をかけてくってことですよ。だったら10億20億これからうちらは、その審議をしていかなければならないことですよ。我々議会の責任として。その10億20億の用途の説明が、虚偽でないって誰が言いきれんの。それがすごい怖くて、これを結果的に5千万取り下げということになったし、収用もなしにはなったんだけど。著しく俺は信用できないよ。町長が出してくる素材というか材料が。金額の根拠が。だから、皆さん何も言わないけれども、どう思っているのかが知りたい。これからこの建物建てますって、10億ですよ、この生簀を作りますって、3億ですよって。本当かなって思っちゃう。今回全然違ったから。根拠がなかったから。それで、欲しいものを高くても買うという話だから。じゃあ例えばこのコップ欲しかったら1億でも買うのかって、税金で買うのかって。そんなことは許されるわけないと思う。だから、もう終わってしまったからそれで良いというよりは、これからもちゃんと信頼関係がある議会と行政じゃないと、物事って決めていけないと思う。その辺は、議会として、ちゃんとここは一回指摘するべきだと思う。

○議長（千葉 隆君） 指摘で終わるかどうかも含めて、小委員会で、まずまとめようってことなんですよ。大久保議員さんが言うように、これで終わったことだということにならないから、それをたたき台を作ろうということ、小委員会で。委員長が言うのは。今、時間もないから。

○委員（黒島竹満君） だから、この出してきた資料は本当ですよって念を押したのは、そこにあるんだよ。この資料に基づいて、後からチェックしていけるよっていう部分で、本当ですよって念を押したのはそこにあるんだわ。だから、そういうのも含めて、今後、小委員会でまとめていかないと駄目じゃないかって思うんだわ。

○議長（千葉 隆君） 嘘は言わないと言ったけれども、失念してて、間違っただけを言っていたことはあるからね。日本サーモンの水質検査したって言ったけれども、水質検査してないこともあるから。勘違いでしたって。

だから、今できないというのは、あまりにもちょっと膨大に事例がありすぎるから、少し小委員会でまとめて、そしてそれについて、行政のほうに、どういうふうな対応をするのか、町長のまた考え方をまとめて、町長と話し合いが必要になるのかもしれないし。だからその辺、小委員会のメンバーの人に、メンバーじゃない人はできる限り自分の意見を言ってもらおうというか。だから小委員会の日程を何日にしますとか。

○委員（関口正博君） 一つだけいいですか。

○委員長（赤井睦美君） 関口委員。

○委員（関口正博君） もちろんですね、今言っていることもごもっともだと思うけれども、自分この5千万、上八雲の施設5千万というのを議会にかけられたときに、当初から絶対におかしいなと思っていましたよ。おそらくこれ皆さん感じてたんじゃないですか。きちんと見てるんであれば。この施設を見に行ったわけでもなく、写真を見せられて、要は中身に何枚か写真やって、土地がいくらで建物が4千なにがしでってという説明。これ今でも僕覚えてるんです。これ普通に考えたら、それをやすやすと通した。もちろん町長の責任というのは、行政側の責任というか、我々はそういう資料、昨日もやりとりあったけれども、資料に基づいて判断するとするならば、我々だって相当な責任がありますよね。結局取り消したし、種苗に関してもそういう部分にはやったんだけど。大した精査もなく落としてしまった責任というのは、僕は逆にすごく町長の責任も当然重いんだけど、この議会の責任というのも重いことなんだなっていうのは今回感じたことです。率直に。もちろんあとからいろんなことは言えるんだけど、そこは改めて議会として、小委員会の中でちょっと揉んでもらいたいですね。信用できないとするならば、全てのことがそうだというのはそのとおりだと思います。でもそういう目で今度我々は見えていかなきゃならないし、その義務があるということはやっぱり一人ひとりちゃんと、逆に考えないとならないっていう裏返しでもあるので。そこは議会として、相手ばかり責めるのも分かるんだけど、そこはちょっと一つ言っておきたいなと思います。僕自身も反省してるし。

○議長（千葉 隆君） でも、見に行きたいと行ったときに、見に行けない。要求はしたけれども、実態のところは現実的に立ち入りできない。それから、金額のことを言っても、積算根拠のところは、そこは弱かったかもしれないけれども、その売買の価格だっているのを示された。その部分は、相当あると思うんだ。売買の金額だけで判断したというのは。でも普通、そういう資料を作ってきたときに、根拠のないもの今まで出されたことがあるのかと言ったら、違うんだよね。今までは。だから、ここが大久保さんが言うように、信頼関係の中に出てきた書類に基づいて、審議はしたんだけど、その真贋性を見抜けなかったということは、議会にもあるよね。

○委員（関口正博君） だから、それは議長の追い込みだって今までもそういうことも多々あったかもしれないし。ただそれを言ったらキリがないってことですよ。これは、お互いの信用関係にとって成り立つって、先ほど大久保さんが言いましたが、それはそのとおりであって、もちろん今回はお互い信用を揺るがすものであったっていう認識はありますが、同時に町民からの議会の信用というのは、失うことにはなりますよね。だからそこは言ったら、キリがないのかなって。

○議長（千葉 隆君） だからこそ質すところは質さないと、逆に言ったら、もっと議会の信頼は失墜すると思うんだよね。きちんと自分たちのことも質すところ質さないと。だって逆に言ったら、5千万でこのまま進んでたら、やっぱり取返し付かなかったんじゃないかなって思うんだよね。

○委員（関口正博君） 収用は、僕はあとから思い返していろいろなやりとりがあつて、これはやるべきではないっていう考えになった。ただこの、上八雲の土地の5

千万、僕はサーモン養殖事業のほうから見るから、バックアップ施設の重要性、これも町長にも説明していましたが、もしかしたらそれだけの価値というのはあるのかなって。だから欲しい人から見たらそうだっていうのは、もちろんそのとおりにですよ。

○議長（千葉 隆君） 最終的に5千万でもいいんだけど、5千万円で買うまでに、先に適正な価格がいくらであるのかっていう手続きを取らなかったことが、やっぱり最大でしょって。

○委員（関口正博君） 自治体の取るべき手法じゃないことは間違えないですけどね。やり方としてはね。

○議長（千葉 隆君） だから、それを先に価格決定してしまったから、必要ないってやっちゃったんだわ、今回。

○委員（牧野 仁君） そこだよな。

○委員（関口正博君） もしかしたら、損失かもしれない。町にとって。もしこのサーモン種苗、これは将来にならないと分からないことでもあるんだけど、なかなかあんな施設は確かにないのはいんです。養鱒場で水利権なくてなんていうのは、なかなか珍しい施設だっていうのは、これも後から気付くことではあるんだけど。後々その判断というの、今どうのこうのじゃなくて、方法論がね。だから、生産法人のほうで、逆に買えるのかなってというような気はしているんですね。それは自治体でやろうとしているからまたおかしい話になるわけであって、生産法人の設立の時期を聞いたというのはそういうこともあって、上八雲だってこのままで終わるのか終わらないのか分からないですけども。

○委員長（赤井睦美君） 私も、資料請求して、昨日のおぼこ荘もそうですが、資料請求して初めて今まで説明されてなかったことが分かるということが、今までも今後も本当にしつこく資料を請求していかないと、どこが本当なのか分からないっていう気持ちはあるし、今日せっかく説明してもらっても、すっきりしてないって皆さんの顔を見て思いますから、もっと本当に町民に議会報告会で報告するということになっていきますので、すっきりと報告できるように、これからも取り組んでいきたいと思います。よろしくお願いいたします。

では、これで終わります。お疲れ様でした。

〔散会 午後1時51分〕